№06

四国こどもとおとなの医療センター

Interview
森　合音／ホスピタルアートディレクター

ホスピタルアート

人々の心をつなぎ、病院を育てる

病院でアートと聞くと、芸術家による絵画や壁画が展示されているイメージを持つ人もいるのではないでしょうか。しかし、香川県善通寺市にある四国こどもとおとなの医療センターのホスピタルアートは展示が目的ではありません。患者さんやご家族、あるいは職員や地域のボランティアの皆さんが一緒になって、課題を解決するためにアートの力を利用していると、ホスピタルアートディレクターの森さんはいいます。

たとえば、看護師から「屋上庭園で患者さんを散歩させてあげたいけれど、日差しが強くて」という声が聞こえてきます。すると、他の職員からも「じゃあ、日傘があればいいんじゃない？」「それなら、患者さんに絵を描いてもらおうよ」といった会話から新しいアートが生まれます。思いがこもった日傘だからこそ、初めて使う人も大切にしてくれるそうです。

四国こどもとおとなの医療センターは、善通寺病院と香川小児病院を統合して2013年に開設された病院です。設計段階からアートを取り入れており、屋上庭園用の日傘が生まれたように、実際に使っていくなかで職員の気づきや提案、ボランティアの皆さんの気持ちに支えられ、新しいアートが次々に生まれています。アートが病院と地域の人をつなぎ、建物の内外がさらに温かい空間へと変化している、そういう意味で四国こどもとおとなの医療センターは、地域の人々が誇りに思える理想の病院へと進化していると森さんはいいます。

小児救急病棟からの相談で生まれた手作りのキワニス・ドール。キワニス・ドールとは、幼い子どもたちに治療について説明する時に使われる人形や医療器具のミニチュア。写真は福家ひとみ看護師、完成したキワニス・ドールを取りに来たところでパチリ

エントランス前にある「こびとのいえ」。「立ち入り禁止」をやさしく伝えるにはどうすればいいのか、という思いから生まれた

屋上庭園と日傘。地元の中学生も手入れを手伝っている庭園には四季折々の花が咲き、みんなの憩いの場となっている。太陽が元気過ぎる日には、本文で紹介した日傘の花も咲く

霊安室から駐車場へと通じる通路一面に描かれた花房。看護師の発案により177名の職員が一輪ずつ、思いを込めて描いた“感じるアート”

廊下の壁画と一体となったニッチ。ニッチとは隙間という意味で、扉の中にはボランティアたちが作った、メッセージ入りのプレゼントが入っている。今日は何かな？

エレベーターの場所を示すサイン（案内）。子どもにもわかりやすく、列車が進む線路に沿って歩けばたどり着ける

近接する善通寺にある、樹齢1200年の“楠の木”をモチーフにしたイラストが描かれた外壁。色とりどりの若木にみのる実を表現したハートは、入院や療養中の子どもたちが描いた原画を拡大転写したもので、1枚1枚に個性が宿っている

成育（小児領域）エントランスにある、からくり時計「このき」。赤い太陽の時計は1時間ごとに音と一緒に1周する。幹の赤い小部屋は、子どもだけが入ることのできる小さな図書室

四国こどもとおとなの医療センター
（香川県善通寺市）

許可病床数689床。成育医療（小児領域）と成人医療を二本柱に、高度専門医療を提供する地域の拠点。2013年の新築時には設計段階から病院全体にアートを取り入れて、メディアから注目された。